

市場から 世界をみれば

ISG 情報システム株式会社 大谷淳一



第18回「身近になった」遺伝子操作

その会社が「YES」とる遺伝子型の細胞が共存
言わなければ、食べるもしている状態の一個体の
のがなくなり、金のないことをキメラ（ギリシア
者は栽培すらできなくなる。神話に登場する怪物に由
来）と呼ぶが、遺伝子組

る。
しかし、前回で紹介し
た通り、実を結ぶのは一
世代のみとして、その種
子が成長しても実は取れ
ないように遺伝子操作
することもできる。その
義すら変化するかもしれ
ない。

作物を開発した会社が利
権を守るためである。つ
まり、種子が欲しければ、
その会社から販売しても
らうほかはなく、種子の
独占を許しているのだ。
このような現象と遺伝
子組み換え作物の危険性
を指摘している科学者も
多く存在している。彼ら
の主張は次の2つである。
1 食物・作物の「一社
独占が起こりつつあり、
生物学では異なる。需要があるのだ。

さて、遺伝子組み換え
作物の開発において、現
在最も熱いのがインドで
あると言われている。イ
ンドでは、この業界を政
治が後押ししている。政
府や自治体は多くの技術
支援や支援活動につなが
る援助を行っており、G
M作物を大々的に広めよ
うとしているのである。
GMの穀物は家畜など
の飼料として使われるケ
ースがほとんどであるが、
野菜や果物の場合は直接
人間の口に入ることにな
る上、肉類と違って生で
も摂取する。このことに
関して欧州や日本では消
費者の不安が根強く、拒
否反応も半端ではないが、
インドでは国も関与して
GM作物の開発に余念が
ない。
あえて言うならばイン
ド政府は、世界のGM技
術の拠点となることで海
外企業の誘致を行い、雇
用と外貨を稼ぐことを目
的とし、最終的にインド
国内にGM技術を根付か
せ、インドの技術にすり
替えようとしている。
こうした状況を各国の
GM会社や種苗会社が歓
迎し、インドへの会社の
進出が進んでいる。イン
ドのある地域では遺伝子
関連の企業が100社以
上存在しており、あと数
年でGM開発の世界では
他の追随を許さない中心
地となるであろう。シリ
コン・バレーの生物版で
ある。

【略歴】 1957年北
海道美唄市生まれ。85年、
食品管理、生鮮管理のシ
ステムを開発する情報シ
ステムを創業。荷受卸売
業者や食品製造会社、仲
卸業者向けのコンサル
ティング、セミナー、業
務改革、講演を各地で行
っている。主な執筆とし
て「青果卸の業務改善」
「青果卸の業務改善2」
「食糧操作」などがある。